

---

# 変わるきっかけ

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

変わるきっかけ

### 【Nコード】

N6017D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

とにかく厳しい今日子先生。その先生から自分達の要望を勝ち取る為に忠直と健三は先生の弱みを握ってそれをダシにしようとするが。ドタバタチックです。

## 第一章

### 変わるきっかけ

「駄目です」

新井今日子はいつもの厳しい顔で彼に告げた。

「そんなことは許せません」

「ちよつと位いいじゃないですか」

「なあ」

彼のクラスメイト達も彼の言葉に応える。その彼神宮忠直は軽い調子で今日子に話していた。

「これ位は」

「校則は校則です」

しかし今日子はこう言つて彼の言葉を退ける。

「どうしてもというのなら校則を変えなさい。いいですね」

「そんなのできたら困らないよな」

「なあ」

また忠直とクラスメイトは顔を見合わせて言い合つ。彼等にとってみればそうなのだが今日子にとってはそれは全然違つことなのであつた。

「話はこれで終わりです」

彼女は話を一方的に打ち切つた。

「そういうことで。それでは」

「えっ、待つてくれない先生」

「まだ話すことは」

「私には話すことはありません」

こう言つと踵を返す。そうしてそのまま立ち去る。忠直とクラスメイトの若田部健三は困つた顔でお互いの顔を見合わせて廊下で言い合つたのだつた。

「ねえと思わねえか？」

「俺も同じこと言おうと思っただけだよ」

健三はそう忠直に言葉を返す。黒髪を丸坊主に近い位に短く刈ったいささか険しい顔の少年だ。少し小柄で何か勿体ぶった物腰が面白い。

「その通りだよ」

「そうだよな」

忠直も黒髪だがこちらは長髪だ。それを後ろで束ねている。顔は少し細長く精悍な顔をしている。それだけ見れば男前と言ってもいいが何故か口調が軽いのがアンバランスだった。健三が制服をしつかりと着ているのに対して彼はその詰襟のボタンを上の二つ外し襟をめくってみせている。

「何でああなんだか」

「あの先生はいつものことだけれどな」

「それを言ったらお仕舞だろ」

忠直はそう健三に突っ込み返す。

「綺麗なのにな。何で性格はあんなにきついんかね」

「外見にあつた性格だけれどな」

今日子は学校では美人として通っている。よく手入れされた黒髪を後ろで束ねて下ろし切れ長のきつい目につつすらとアイシャドーをしている。肌は白く目鼻立ちが通っている。小さな唇に見事な紅のルージュをいつもしている。長身でモデル並のプロポーションをいつも黒いタイトのミニと黒のストッキング、白いブラウスに黒ベスト、ネクタイといった格好だ。服装も実によく似合っていた。

「俺はそう思っただけだよ」

「だからそれを言ったら話にならねえだろ」

忠直はまた健三に突っ込みを入れ返す。

「とにかくだ。困ったよな」

「そうだな。折角皆で楽しくやろうとしていたのにな」

「屋上でのクラス会な」

いささか高校生のやるものにしては幼稚と言えるものだったが忠

直は気にはしていなかった。

「いいと思うだろ？皆で派手に」

「ああ」

健三も彼の言葉に頷く。

「体育祭の後でな。打ち上げでな」

「それしようと思っていたのにな。何であの先生はそれを認めてくれないんだか」

「だから校則だろ」

健三はさつき今日子に言われたことをそのまま忠直に言ってきた。

「そのせいで駄目だって言われたじゃないか」

「校長先生の許可はもらったぜ」

こっちは上手くいった。今の校長先生はかなり鷹揚な性格で彼等の申し出を笑顔で受け入れたのである。他には担任の先生の許可ももらった。ところがここで副担任の許可も必要だったのだ。その副担任が他ならぬ今日子であったというわけなのだ。

「それでも校則が駄目か」

「どうするんだ、それで」

健三はあらためて忠直に問うてきた。

「諦めてどっかでやるか？教室なら大丈夫だろ」

「いや」

だが彼はその言葉に首を振る。

「屋上だ。屋上っていったら屋上なんだよ」

彼もかなり我儘であった。

「そこでしないと駄目だろ。青空の下で楽しくやらないとな」

「御前も随分こだわるんだな」

「男はこだわりの生き物なんだぜ」

彼は居直ったように言ってきた。

「それを忘れたら男じゃない。そう言うだろ」

「そんな話は聞いたことがないがな」

健三は少し冷静に言葉を返した。

「時には妥協も必要だつて言われることがあつてもな」

「男は妥協なんかしねえ」

それでも忠直は引かない。引くことを知らない。それはさながら闘牛場の牛のようであった。いつも最後はマタドールに倒されてステーキにされる牛であつた。

「何があつてもな」

「そうか。それはわかつた」

健三もそれには根負けして頷くのだつた。

「しかし神宮よ」

「何だよ、今度は」

「御前カードとか弱いだろ」

不意にこう問うてきたのだつた。

「実際のところ。それはどうだ？」

「あまり勝つた記憶はないな」

そして自分でもそれを認める。

「特に最近は。何でそんな話するんだ？」

「いや、何となくわかつたからな」

今の話である。

「そつだろつな、やつぱり」

「何でそこで納得するんだよ」

「御前のその性格からだよ」

健三はこつ言葉を返す。

## 第二章

「それだったら弱いな。間違ってもギャンブルには手を出すなよ」  
「何が言いたいかわからねえけれどよ。とにかく」

彼は言う。宣言に近いまでに。

「俺はやってやる。何があってもな」

「屋上での打ち上げか」

「絶対だ。先生をギャフンと言わせてやるぜ」

「そんな問題じゃねえと思うけれどな」

忠直は今誓った。そうしてその日は決意をさらに強固なものにする為に一旦私服に着替えて自動販売機で五〇〇ミリリットルのビールを十本程買った。そうして健三の家に行きそこで二人で飲むのであった。

「今回は決起集会だぞ」

「二人でなんだな」

「人数は関係ねえ」

もう出来上がっていた。見れば早速一本空けている。早い。

「要は気合なんだよ」

「そうなのか」

「わかったら御前も飲め」

家に置いてあったピーナッツをかじる健三に対して言ってきた。

「どんどんな。そして何があっても勝ち取るぞ」

「屋上での打ち上げをだな」

「ああ、まあ酒はなしだけれどな」

「学校で酒飲む馬鹿がいるか」

健三は思わず突っ込みを入れた。彼等とて一応は隠れて飲んでいるのである。なお健三の両親は酒では全く言わないのであるが。

「それはそうだけれどな」

「それでだ。何か策があるのか？」

「策？」

「だからだ。それを勝ち取る方法だよ」

右手に缶を一つ持って忠直に問う。問いながらそのピンを外して口に含む。泡とビールそのものの苦い味が忽ちのうちに口の中を支配していく。

「あるのか？どうやってあの先生を納得させるんだ？」

「さてな」

それに対する忠直の返答はこうであった。

「何かあるかな」

「何かあるかなって御前」

今の忠直の言葉には流石に呆れた。

「あるからこうして二人だけで決起集会やってるんじゃないのか」

「あるのは気迫と決意と執念だ」

彼はそれはあると言う。

「他に何かいるのか？」

「頭に決まってるだろうが」

健三は呆れ果てながらも忠直にまた突っ込みを入れた。二人で胡坐をかいてその間にビールやつまみを置いて飲んでいるがその風景が急に馬鹿馬鹿しいものに思える程呆れてしまっていたが。

「何でそれでやるって言えるんだよ」

「何とかなる」

しかし忠直はまだ言う。

「俺がやるんだからな」

「その根拠のない自信は何処から来るんだ」

再度突っ込みを入れる。

「一体全体」

「だから任せておけて。何とかでもなるさ」

「普通そういう場合は何とかなるさだろ？」

ビールを飲みながら呆れた顔で言葉を返す。

「しかし。まあ」

それでも健三はそんな彼を憎めずにまた言うのだった。

「何とかしてみな。できたら褒めてやるからな」

「ああ、だから任せておけて」

彼は上機嫌のまま答える。

「絶対に屋上でパーティーだからな」

高らかにそれを言うのであった。その日はそのままとことんまで飲み明かしそれを決起集会とした。といつても殆ど彼だけであつたが。

次の日。二日酔いで困っている健三の席に忠直が来た。彼は晴れやかな顔で笑っていた。

「何だよ、あの程度で終わりかよ」

「随分飲んだからな」

健三は青い顔で忠直に答える。

「だからだよ。御前は平気なのかよ」

「あの程度じゃな」

忠直はその晴れやかな顔で答える。

「全然平気だぜ」

「酒豪だね、全く」

今の言葉にはいささか皮肉が込められていた。

「とにかく俺は当分死んでいるからな。多分夕方までだ」

「夕方までかよ」

「その間何かするんだつたら一人でやってくれ」

「こつても言うのだった。」

「悪いがな」

「悪いも何も夕方まで何もしないさ」

彼は平気な顔で健三に告げた。

「だから安心しなつて」

「夕方まで何もしないのか？」

「ああ、そつだよ」

にこりと笑つて健三に告げる。

「少なくとも学校にいる間はな」

「おい、何だよ」

健三はそれを聞いて二日酔いで青くなりついでに表情もかなり悪くなっている顔を上げた。そうして忠直に対して問うのであった。

「先生は学校にいるんだぞ」

「ああ」

教師だから学校にいる。これは言うまでもない大前提である。

「それで何もしないのか」

「だってよ。先生だぜ」

今日子に対して言及するのだった。

「何か隙を見せると思つか？ここでな」

「隙をか」

「見せると思わないだろ」

そうしてまた健三に問う。

「学校じゃ何も尻尾は掴めないさ」

「言い換えれば掴ませてくれないんだな」

「そういうことさ。だから学校では何もしないさ」

彼はにこりと笑って健三に告げた。

### 第三章

「今はな。それよりだ」

「何だよ」

「先生つて何処に住んでいたっけ」

不意に健三にこう尋ねてきた。

「この街だったよな、確か」

「ああ、そうだよ」

健三は忠直のその問いに対して答えた。

「駅前のマンションだったな。商店街の方の」

「そうか、あの辺りか」

そこなら土地勘がある。二人にとっては小さい頃からの遊び場だ。

忠直はそれを聞いて今度は考える目になったのであった。

「あの辺りだったら何処にどんな店があって誰がいるかまでわかってるしな」

「それと先生がどう関係あるんだよ」

「それで先生は独身だったよな」

「それは間違いないな」

健三は今度の情報に関しては絶対の自信があった。

「先生の左手見てみる」

「左手か？」

「薬指な。指輪ないだろ」

そこを指摘するのだった。

「ということだ。つまりは」

「結婚していないってことか」

「元々指輪をしない人もいるけれどな。それに」

「それに？」

健三の言葉をさらに聞く。

「ずっと名前変わっていないだろ。これで決まりさ」

「そうか」

「夫婦別姓とかそんなのでもないしな、あの先生は」

「そうだな。そういうの嫌いらしいし」

意外なことに今日子は女とはどうあるべきか結構五月蠅いことで知られているのだ。わかり易く言えば昔の女性気質を愛しているのである。

「じゃあ確実に独身か」

「口説くなよ」

冗談めかしてこう忠告する。

「間違つてもな」

「俺は年下趣味なんだよ」

忠直はしれつとした様子で健三のその冗談めいた忠告をかわす。

「だから先生には興味なしさ」

「誰でもいいってわけじゃないのか」

「馬鹿、御前と違うよ」

とにかく手当たり次第にアイドルなら女優なら誰でもいいとかいつも言っている健三に対して少し嫌味を入れて言葉を返した。

「好き好きつてのがあるんだよ」

「そうなのか、御前のだな」

「そうさ。けれどあの辺りだったらな」

忠直は考える顔になった。どうやら本当に何かを仕掛けるつもりのようにだ。

「やってみるか。夕方あそこでな」

「何かするんだな」

「何かするから声をかけるんだよ」

笑って健三に答える。

「そうだろ？これでわかったよな」

「ああ。それじゃあ夕方までには復活しておくぞ」

「頼むぜ」

こう健三に声をかける。

「絶対にこの夕方で屋上でのパーティーを勝ち取るからな」

「勝ち取るのか」

また思わず忠直に突っ込みを入れた。

「そういうものだったのか」

「何でも勝ち取るものさ」

彼は胸を張って言うのだった。

「勝利も栄光もな」

「この場合は勝利だけじゃないのか？」

「体育祭の後だから勝利なんだよ」

それでも忠直は言うのだった。

「女の子の短パンを見ながらな」

「生憎ジャージだぞ」

これにはすぐに健三から突込みが入った。

「よく見る、それは夏だけだろうが」

「そうか、面白くないな」

「最近寒いからな」

これがジャージの理由であった。

「それでだ。あと」

「あと？」

「御前みたいなのがいるからだよ」

ジロリと忠直を見ての言葉であった。

## 第四章

「俺みたいなのか？」

「御前みたいに女の子の脚ばかり見るのがいるからだよ」

「いいだろ。どうせ見たって減るもんじゃないしよ」

忠直にとっては女の子の脚が最大の楽しみなのだ。それで運動会も大好きだというわけだ。彼としては今の短パンよりも昔のブルマの方が好きなのだが生憎忠直の先輩達の目のせいでそれはなくなってしまうのである。

「とにかくだ。ジャージらしいな」

「面白くねえな。じゃあ余計にここは」

「打ち上げパーティーに専念するんだな」

「ああ、その為には手段を選ばないぜ」  
表情も言葉も本気であった。

「何が何でもな」

「あの先生だけれどいいんだな」

「だから最初からそのつもりなんだよ」

そう健三にも語る。

「わかつたらいいな」

「まあ協力させてもらうさ」

健三もそれに頷くのだった。

「丁度巨人が優勝できなくて機嫌がいいしな」

「いいことだな、それは」

これには忠直も笑う。彼も健三も巨人が大嫌いなのだ。

「あのまま惨めに凋落してくれれば言うことないんだがな」

「俺はあの爺が成仏してくれればいいさ」

健三は巨人のトップが大嫌いなのだ。日本一の嫌われ者をだ。

「あいつ死ぬかね、そう簡単に」

「毎日死ぬように寝る前に祈ってるんだけれどな」

そうした人間は日本に多い。この人物が死んだならば日本中で大祝賀会が開かれるだろうとまで言われている。およそ老害という言葉がここまで相応しい人間もいない。日本に及ぼした害毒という点では空前絶後の男であろう。戦後日本の腐敗の象徴と言ってもいい存在だ。

「どうかね」

「早いところ死んで欲しいんだがな」

忠直もそれは同じ考えである。

「じゃああの爺の一刻も早い地獄行きを祈る為にもな」

「パーティーを実現させるんだな」

「ああ、それを考えると気合が入るぜ」

完全にやる気になった。

「不景気不景気って言われていてあいつ等だけ金持っているしな」

「そういえばそうだよな」

健三も忠直の言葉でふと気付いた。

「何であいつ等あんだだけ金積み上げて他のチームの選手強奪しているんだ？そもそもその金も公表よりずっと多いそうだけれどな」

「金はあるところにはあるんだろ」

忠直はシニカルに言った。

「それで金持ってる奴が不況不況って騒ぐんだろうな。うちの親父がそう言っていたぜ」

「そういえばあのミスター スポックを悪くしたような顔のキャスタ―は五億で」

「辛気臭いことしか言わない十一時の爺さんも二億だよな」

「マスコミって儲かるんかね」

「滅茶苦茶儲かるんだろうな」

忠直はさらにシニカルになっていた。

「それに悪事もやりたい放題みたいだしな。あの爺見ていると」

「いい御身分だな、おい」

健三も忠直につられてシニカルになった。二日酔いも何時の間に

か消えていた。

「儲かってやりたい放題なんてな」

「あの爺の飯は一食数万円らしいぜ」

「ふざけるなつてんだ」

健三はこれには本気で怒った。

「政治家でもそんなの滅多に食ってねえぜ。普通の金持ちでもよ」

「そうなのか」

「皆案外質素なんだよ」

実際のところはそうなのだ。何故か社会の木鐸である筈のマスコミだけが不景気の中でも贅の限りを尽くしてきている。戦後日本の七不思議の一つである。強いて言うならばそれこそ口裂け女や人面犬に匹敵する。おそらく錬金術を使っているのであろう。

「そんなもんだよ。何か余計に腹が立ってきたな」

「じゃあわかるな」

「ああ」

忠直の言葉に頷く健三であった。

「体育祭の打ち上げとあの爺の一刻も早い地獄行きを祈る為に」

「パーティーを実現させるぜ」

「わかったぜ」

二人は今誓い合う。そうしてその為に最大の障害今日子の攻略に取り掛かるのであった。ところがこれが予想以上に困難なのであった。

「駄目だ、手懸かりがねえ」

「俺もだ」

三日後二人はその屋上にいた。そうしてそこで話をしていた。

「あの先生学校終わったらすぐに車でマンションだからな」

「買い物とかもしないしな」

健三はそれも言う。

「プライベートの動きってないよな」

「移動は全部車だからな」

だから何も掴めていないのであった。

「しかもな。車はダークミラーで中は見えない」

「駐車場もマンションの住人しか入れられないしな。カード制で」

「参ったな」

忠直はあらためて溜息をついた。溜息をつきながら昼食にパンと一緒に買った野菜ジュースを飲む。人参とトマトの味を味わいながら話をする。

「このままじゃよ」

「ここでパーティーなんてできねえぞ」

「そんなことになってたまるかよ」

しかし忠直は全く諦めてはいなかった。

「何があってもここだ。絶対にな」

「俺もそのつもりだけれどよ」

健三は鮭のお握りを食べながら忠直に言う。

「このままじゃやばいぜ」

「それもわかってるさ」

二人は屋上で胡坐をかいて背中をフェンスにもたれかけさせている。そうして昼食を食べながら話をしているのだ。そこで忠直はふと思った。

## 第五章

「あのマンションだよな」

「ああ」

健三は何を今更といった感じで忠直の言葉に頷いた。

「そうだけれどそれがどうしたんだ？」

「外からじゃ全然わからないんだ」

忠直は少し俯いて考える顔で呟いた。

「中に入ればどうだろうな」

「その中に入られないから困ってるんだろ」

健三はこう言い返す。

「どうやって中に入るつもりなんだよ」

「あそこの人に知り合いを作るんだ」

「知り合いを？」

「駅前の喫茶店あるだろ。あの和風の」

「ああ、あそこは」

健三もその店を知っていた。それで忠直の言葉に応える。

「アンティークだろ」

「そのウエイトレスのお姉さんあのマンションにいるんだ」

彼はそれを知っていたのである。

「この前マスターとそんな話をして聞いたの聞いたんだよ」

「そのウエイトレスさんとお知り合いになつてか」

「そうさ。これでどうだろうな」

「いいんじゃないかねえのか？って言いたいけれどよ」

しかし健三はここで大きな疑問を抱かずにはいられなかった。それは下手をすれば屋上でのパーティー実現よりも難しいことである。

「できるのかよ。その人と彼女になるって」

「大丈夫だって」

「本当かね」

即座に突っ込まずにはいられなかった。今の大丈夫という言葉は全く根拠のないものにしか聞こえなかったから当然であった。

「今の言葉は」

「俺を信頼しろって」

「信頼できたらいいな」

「ここでも言葉は醒めている。

「果たしてどうなるか」

「三日後な」

それでも忠直は変わらない。平気な顔で健三に言うだけだった。

「確実になっっているからな」

「期待しないで待つことにするさ」

「期待しておけよ」

これが忠直の言葉であった。とにかく三日後であった。段々時間がなくなってきたているがそれならギリギリかと思いつながら本当に期待しないで彼の次の報告を待つのであった。

そうしてその三日後。忠直は教室において明るい声で健三に対して言うのであった。

「上手くいったぜ」

「いったのかよ」

「ああ、全然な」

「ここにこと笑顔でまた言う。」

「告白したらにこりと笑ってオツケーしてくれたぜ」

「そうなのかよ」

あまりにも意外な言葉に健三も内心かなり呆れていた。

「何でそんなに上手くいくんだよ」

「俺に不可能はないのさ」

彼は笑顔で言う。何の根拠もなくだ。

「これで手筈は整ったな」

「それよりな」

健三は醒めた目でその忠直に対して言う。

「御前に彼女ができたのか」

「ああ、そうだぜ」

忠直はしれつとした顔で健三に対して告げる。

「それがどうしたんだよ」

「どうしたもこうしたもあるか」

そう忠直に対して言葉を返す。顔が怒ったものになっている。

「何で簡単にそう話が進むんだ。御前に彼女だって」

「彼女ができたのに嫉妬しているのか？」

「そうだよ」

さらに不機嫌な顔で忠直に言う。

「何でこんなに簡単に御前にな」

「俺はもてるからな」

ここでも忠直は不遜なまでに自信に満ちていた。そんな彼を見て健三はいい加減頭痛を覚えてきた。今日子先生のことよりこっちの方が問題だとさえ思っていた。

「だから簡単にな。ああそうそう」

「それで何だよ、今度は」

「ちゃんと最後までいったぜ」

彼は笑顔で言う。

「あの人の部屋でな。やっぱり年上の女の人ってな」

「それ位俺でもしてるよ」

健三も慚然として言葉を返す。

「中学生の彼女とな」

「おい、犯罪者」

素直に自分にも彼女がいてやることはやっていると不機嫌そのものの顔で言い返すといきなり忠直にこう言われた。

「中学生に手を出したらまずいだろ」

「御前に言われたかねえっ」

流石に彼も忠直には言われたくはなかった。

「ったくよお、何で御前がそんなに上手くいくんだ。俺はそこまで

「こぎつけるのに苦労したつてのによ」

「これも人徳だな」

忠直はまたしても自分に都合のいい解釈をする。

「俺の前世からのな」

「じゃあ来世ではゴキブリがカマドウマに生まれ変わるな」

言葉にいちいち突っ込むのも疲れていたがあえて突っ込む。

「人徳の話になると」

「何か御前冷たいな」

「気のせいだと思ってくれ」

これ以上話をするのもあれなので打ち切ることにした。

「それでだ」

「それでつて何だよ」

忠直は健三の言葉に顔を向ける。

「マンションには何時行くんだ？」

「今日だよ」

彼はあっさりと言う。

「今日行くぜ」

「何か動きが早いな」

「当たり前だろ、もう時間がないんだからな」

「そりゃ誰かさんが三日も時間を潰したからな」

健三はそう忠直に嫌味を言う。

「まあ今日なら今日でいいけれどな」

「反対はしないんだな」

「するわけないだろ」

彼はまた忠直に対して言うがその目はさらに不機嫌なものになっていた。

「屋上でパーティーするんだろ？」

「どうしてもな」

彼もその言葉に頷く。忠直は本気であった。

「やってやるぞ」

「そうか。じゃあ行くぞ」

忠直に対して声をかける。

「今日授業が終わってからな」

「彼女の家に行くからな」

「彼女の家にか」

健三はそれを聞いて何か不機嫌な顔のままと言っただった。

「悪いか？」

「悪いっていうかよ」

彼はさらに不機嫌な顔になる。それが何故かは彼もわかっていることであつた。

## 第六章

「他の男を彼女の部屋に入れるのかよ」

「何かするわけじゃないだろ？」

「年上には興味ないからな」

健三は言う。

「それに人の彼女には何もしないよ」

「最初の言葉が気になるな」

忠直が指摘するのはそこであった。

「最初！？」

「御前年上には興味がないのか」

「あ、ああ」

忠直のその問いに対してこくりと頷く。不機嫌な顔が消えていた。

「そうだけれどよ。それがどうしたんだよ」

「やっぱり御前は犯罪者だな」

「犯罪者っておい」

また彼の言葉に顔を不機嫌にさせるのだった。言うまでもなくその気分も。

「だから何で俺が犯罪者なんだよ」

「中学生とやったら駄目だろ」

「彼女なんだからいいだろ」

「それでも駄目なものは駄目なんだよ」

忠直は横目で彼を見ながら言う。

「このロリコンが」

「幾ら何でもロリコンはないだろ、ロリコンは」

「けれど本当のことじゃねえか」

忠直の方が強かった。実に口が減らない。

「中学生かよ。それで何年なんだよ」

「二年だよ」

「ここでは正直に答える。」

「普通だろうが」

「何処がだよ」

しかし忠直の突っ込みは相変わらずの鋭さであった。

「十四歳の女の子が相手なんてよ。警察ものだろうが」

「今度は警察かよ」

「じゃあ今日はマンションに行く前に交番に寄るか」

「交番っておい」

また健三は怒った声で忠直に突っ込みを返した。

「だから何でそこなんだよ」

「中学生に手を出すからさ」

やはり忠直の言うのはそこであった。笑いながらの言葉であった。

「流石にまずいだろ、それは」

「無理矢理じゃないぞ」

健三はそれは必死に否定する。

「俺達は相思相愛なんだよ。別にやましいことは」

「誓って言えるんだな」

「当然だ」

本気での言葉だった。

「誰がそんな非道なことするか。これでも真面目に付き合っているんだ」

「真面目にねえ」

忠直は真面目という部分には本気で疑問を感じた。

「真面目な奴が中学生とできるかね」

「いいだろ、愛には歳なんて関係ない」

「それはそうだけれどな。まあいいさ」

ここで話を打ち切ったのであった。これ以上話をしても健三を怒らせるだけでそれは何の利益にもならないとわかっていたからだ。

「じゃあ今日授業が終わったらな」

「ああ、マンションに行くか」

「彼女と一緒にな」

こうして二人は忠直の新しい彼女の力で先生のいるマンションに入ることになった。忠直の彼女の大学生は茶色に染めた髪を伸ばして少しパーマをかけておりとても大人びた顔をした美人であった。健三はその人に忠直と一緒にマンションに入って部屋の中まで案内されてから彼に囁いた。

「おい」

「何だ？」

「本当にあの人なんだな」

「今会ったばかりだろうが」

忠直も小声で健三に言葉を返す。大学生の部屋はとても綺麗に整頓されていてあちこちに女の子らしいアクセサリーが置かれている。それに部屋の中はローズの香りに満ちていた。

「それでどうしてそう言うんだよ」

「信じられないんだよ」

健三は真剣な顔で彼に対して言う。

「何で御前と彼女が付き合えるのか。っていうかどうして御前があんな綺麗な人と」

「だから人徳だっつってんだろ」

「ここでも彼はそれを出してきた。」

「何度言えばわかるんだ」

「わからねえよ」

健三もこう言葉を返す。

「世界の七不思議にも入れていい位だ」

「そんなこと言ったら世の中は不思議だらけだぞ」

忠直は健三の言葉に言い返す。少し怒った顔になっている。

「別にいいだろ。俺が綺麗な人と付き合えても」

「世の中やっぱりおかしい」

健三は自分が中学生と付き合っていることは棚に上げて言った。  
「全くどうなっているんだ」

「何とでもいえ」

そして忠直も完全に居直る。

「それでだ」

「ああ」

ここで話が動く。

「調べたら先生は四階にいるらしい」

「四階か」

「つまりだ。ここは三階だな」

そこにこの大学生の部屋があるのである。

「すぐ上だ」

「じゃあ行くのは簡単だな」

「そうさ。先生は学校から帰る時間はいつも大体決まってるんだ」

「へえ、そうなのか」

「それも調べておいたぜ」

意外と情報収集の得意な忠直であった。健三は心の中でそれを意外なことに思ったが今はそれは言葉には出さないのでおいたのであった。

「だから今六時だから」

「もうすぐだな」

「そうさ。家には遅くなるって連絡したか？」

「いや、まだだ」

それは今まで気付いていなかった。健三の顔が少し動いた。

「じゃあ連絡しとけよ。まあすぐに終わるだろうけれどな」

「すぐになんだな」

「先生の秘密を掴めたらな」

忠直は笑って言う。

「それで終わりさ」

「何かやっつてることが探偵かスパイみたいだな」

「緊張するか？」

「緊張っていうよりはな」

彼は首を捻ってその言葉に答えた。

「何かそれとは別のものを感じるな。悪いことをしているような」  
「先生のプライベート覗くからか」

「そこまでする必要があるのかねって思ってたな」

健三はそれを気にしだしたのだ。流石にそれはよくないことだと知っている。先生が屋上のパーティーに反対しているのを知っているのだ。

「そこんところどうなんだよ」

「仕方ないだろ」

しかし忠直の決意は変わらない。

「そうでもしなきゃとてもパーティーなんかできないんだしな」

「けれど部屋の中に忍び込むのとかは止めておこうぜ」

「誰がそんなことするか」

流石にそこまでは考えていないようであった。

「あくまで先生の弱みを握るだけだ。それでいいな」

「それも何だかなあ」

「そんなに嫌なら俺だけでやるぞ」

「いや、ここまで来たらな」

彼も降りる気はなかった。こうなったら最後までついていくつもりであった。そうして実際についていくのだった。六時半になると二人は部屋を出た。そうして四階への階段に向かうのだった。

「階段使っんだ」

「一階ならそれで充分だろ？」

そう健三に言葉を返す。

「わざわざエレベーターを使う必要もないだろ」

「まあそうだな」

健三もその言葉には素直に頷いた。

「他の人の迷惑にもなるしな」

「そういうことさ。さて」

階段の前に来た。階段は上に向かうものと下に向かうもの二つ

変わるきっかけ

がある。一人は言うまでもなく上に向かう方の階段を見ていた。

## 第七章

「ここを昇つてな」

「先生の部屋のところまでか」

「何か適当な場所に隠れてな」

それが忠直の考えであった。

「見ておこうぜ」

「わかったよ。それで何かわかればいいな」

「いいんじゃないなくて絶対に見つけるんだよ」

忠直の言葉が強くなった。

「それでいいな。それじゃあ行くぜ」

「よし」

健三も忠直の言葉に頷いた。そうして四階に向かおうとする。その時だった。

下の方から話し声が聞こえてきた。それは若い男女の声だった。

「誰だ？」

「昇つて来るな」

二人はその声を聞いてすぐに気付いた。女の方の声は。

「新井先生だよな」

「ああ、間違いない」

忠直は健三の言葉にすぐに頷いた。

「この声はな」

「まさかここで出て来るなんてな」

健三はそのことに戸惑いを覚えた。

「隠れるか？とりあえず」

「ああ、それより」

忠直はそれ以上に気になることがあった。それについて言う。

「おかしいぞ」

「おかしいって？」

「馬鹿、だからだ」

まだ気付かない健三に少し苛立ちを覚えながら言った。

「声が二つあるだろ」

「ああ、そうだな」

それを言われてやっと気付く健三であった。

「待てよ、それじゃああれか」

「そのあれだよ」

忠直はそこを指摘する。

「間違いない、先生の彼氏も一緒だ」

「彼氏なんていたのかよ、あの先生に」

「俺も正直驚いている」

忠直は真顔であった。

「まさかな。いるなんてな」

「あの先生が男と一緒になんて信じられないんだけどな」

健三は完全に先入観だけで話をしていた。しかしそれもまた当然のことであった。何しろ厳しさでは学校一の今日子先生だからだ。

これも当然であった。

「どうなんだよ、それは」

「現実を受け止めるしかないだろ」

忠直の言葉は何気に先生に対してかなり酷いものであった。

「よく考えたら先生も女だ」

「ああ」

言うまでもない大前提だがこれはそもそも当たり前前の話だ。

「それに綺麗だしな。だったら当たり前だろう」

「それもそうか」

「信じられないって気持ちはあるけれどな」

忠直もそれは認めた。

「しかしまあここは」

「とりあえず見ないとわからないよな」

健三は言った。

「それでどうするんだ？」

「隠れる」

健三の提案をそのまま言う。

「それでいいな。とりあえずは」

「隠れて様子を見るんだな」

「そういうことだ。いいな」

「わかった」

こうして二人はとりあえず階段が見えるすぐ側の物陰に隠れた。

そうして今日子先生とまだ名前が全くわからない顔さえもわからないその彼氏を見ることにしたのだ。

「その彼氏ってよ」

「ああ」

二人はまた物陰で話をはじめた。

「どんな人なんだろうな」

「年上かな」

健三はふと考える顔で述べた。

「どうか、そこは」

「いや、わからないぞ」

だが忠直はそれを否定した。というよりは懐疑的な顔であった。

「あの先生の感じだと」

「違っっていうのか？」

「少なくとも女ってことはない」

「何か似合いそうだけれどな」

勝手に先生がレスビアンだという設定までしていた。かなり無茶

苦茶な話だがそれでも二人はその可能性まで考えていたのだ。

「それはないか」

「声を聞くと、相手の」

忠直は言う。

「少なくとも女じゃないな」

「そっだよな、やっぱり」

「あの先生を感じだとな」

忠直はそれについてまた考える。彼も先生に対する先入観だけで考えているがそれでも真剣に考えているのであった。その考えの答えは。

「年下も有り得るな」

「有り得るか」

健三はその言葉に真剣な顔になった。だが言葉はかなりのものだった。

「年下のペットだな」

「おいっ」

忠直は健三のそのボケに思わず突っ込みを入れた。

「それは幾ら何でもあれだろ」

「ないか？」

「ペットって何なんだよ」

彼はそこに突っ込みを入れるのであった。

「それじゃあ先生はサドか」

「サドっぽくないか？」

それでも健三は言うのだった。

「それもかなりな」

「かなりっていうかな」

何故か忠直も無意識のうちにそれに頷いていた。

「似合うけれどな」

「だろう？だからな」

健三はここぞとばかりに言う。

「そうじゃないかなって思ってたな」

「確かにあれだな」

忠直も納得してまた頷く。

「似合うっていったら似合うな」

「だろう？ああしたタイプって年下が似合うな」

「うっむ。誰が出るやら」

変わるきっかけ

忠直は健三の言葉を聞くうちに本当に相手が誰なのか真剣に考えていた。そうしてその彼氏が出て来るのを待っていた。既に最初の目的は忘れてしまっていた。

## 第八章

声が聞こえてくる。その声の一つは今日子先生でもう一つが問題であった。

「若い声だな」

「そうだな」

忠直は健三の言葉に頷く。

「じゃあやつぱり年下かな」

「そうみたいだな。じゃあやつぱり」

「先生、意外とやるな」

忠直はここで先生を褒めた。先生を褒めるのははじめてであった。

「年下をゲットするなんてな」

「ああ。それにな」

ここで健三はその先生の言葉を聞いているうちにあることに気付いた。

「これ先生の声だよな」

「ああ、間違いない」

忠直は健三の言葉に確認してまた頷く。

「けれど喋り方が」

「そういえば」

今度は忠直が気付く番であった。

「あれだな」

「ああ、あの厳しい調子じゃないぞ」

そうだったのだ。下から聞こえてくる先生の声の調子は。

「普通の女の子のそれだぞ」

「女の子だな」

大人の女のそれではないというのが重要であった。

「どうやらこれは見物だな」

「ああ、じっくりと見ようぜ」

二人はそう言い合って隠れて先生を待つ。やがて声が完全にはつきりと聞こえるようになった。

「今日は返さないんだから」

「今日も!？」

先生の意外な声が聞こえてきた。何とも甘い調子である。

「何かな」

「ああ」

忠直と健三はその声を聞いて囁き合う。

「全然違っつていうかな」

「本当に先生なのかよ」

二人は顔を顰めながらも先生とその彼氏の話の聞き続けるのであった。

「まあいい。ここは黙ってな」

「話を聞くか」

そんなことを言い合いながらまた先生と彼氏の言葉のやり取りをまた聞く。先生は二人に気付くことなく相変わらず彼氏と甘い会話をするのであった。

「ところでさ、今日子ちゃん」

「何、憲次君」

見れば先生の服はいつものベストとミニスカートである。服装自体は変わらないがその身体のおちこちを背が高くスラリとした爽やかな茶髪の青年が持っていた。

「最近忙しいの？」

「時間は作るから」

先生は憲次と呼んだ彼氏に顔を向けてにこりと笑ってみせた。

「それは安心して」

「どんなに忙しくてもなんだね」

「だって。憲次君と一緒にいたいから」

生徒達の前で見せる顔とは全く違っていた。それは完全に大人の女というよりは恋する乙女の顔であった。似合わないようであり

似合っているように二人に見えた。

「意外っていうかな」

「驚きだな」

そんな話をしながら忠直と健三は先生を見続けるのだった。

「けれど。無理はしないでね」

憲次はここで先生に対して言うのだった。左手で彼女の豊かな腰を抱いて右手は彼女の右肩に添えている。そうして話をしていった。

先生も彼氏のそんな手をあえて受けていた。

「今日子ちゃんが疲れたら僕が困るから」

「心配してくれているの？」

「うん」

そして先生に対して頷くのであった。にこりと笑って。

「だって。やっぱりね」

「有り難う」

先生は甘い顔で憲次の言葉を受けて微笑む。

「その言葉が嬉しいわ」

「ところでさ」

ここで先生に対して言ってきた。

「何？」

「生徒達にもそんなふうでいているのかな」

「そんなふうって？」

「今日子ちゃんいつも優しいじゃない」

そう今日子に対して言うのであった。

「僕に対しては。自分の生徒に対してはどうなの？」

「えっ……」

先生は彼氏にそう問われて顔を強張らせた。二人はそれを聞いて目を顰めさせるのであった。

「何か先生ってな」

「ああ、そうだな」

健三は忠直の言葉に頷いた。

「俺達の前ではあえて厳しいふうに装って」

「彼氏の前ではあんなにデレデレだったんだな」  
「デレデレっていうかよ」

忠直は先生を見ながら言う。

「あれが地なんじゃないのか？」

「先生のか？」

「ああ」

そして健三の言葉に応える。

「あれだけ自然だと。そうとしか思えないぜ」

「地かよ、あれが」

健三はそのことに驚きを隠せない。まさかとは思うが。しかし忠直の言葉が嘘ではないことは今の先生を見れば見る程十干できるものであった。

「しかしそれだとするとかなり」

「女の子みたいつつうかな」

忠直は首を捻りながら言葉を選んで出す。

「乙女チックだよな」

「そうだな」

「誰にでも優しくして欲しいな、僕は」

憲次はそう先生に語るのだった。じつと先生の目を覗き込んで。

「だって今日子ちゃんはとても優しい女の子だから」

「だからなのね」

「僕にだけ優しくしないで」

彼はまた言う。

「皆にも。それは駄目かな」

「皆にも優しくなのね」

「そうだよ」

また憲次は先生に言った。

「僕はそうして欲しいけれど。駄目かな」

「それは」

「今日子ちゃんはその方がずっと綺麗だし」

言葉が殺し文句になってきた。

「皆にもね。御願いだよ」

「憲次君にそう言われると」

先生も弱かった。その整った大人の女性の美貌をたたえた顔を赤らめさせて言う。

## 第九章

「何か。私も」

「じゃあいいよね」

また先生に問う。

「それで」

「え、ええ」

心の中にまだ抵抗はあるがそれに答えた。

「わかったわ。それじゃあ」

「それで御願いますよ」

憲次はまたにこりと笑って先生に告げた。

「僕だけじゃなくて皆に優しくね」

「ええ」

先生は完全に憲次の言葉に誘われている感じだった。ただなおはそれを聞いて健三に声をかけるのだった。どうにも困惑した顔で。

「なあ」

「何だよ」

「どうにも困ったことになったな」

「困ったことって？」

「だからあれだよ」

ここで彼はまた健三に言う。

「このまま先生の弱みを握ろうと思っていたんだけどよ」

「それができなくなっただっていうんだな」

「じゃあ御前できるか？」

彼は健三に問い返した。

「今の先生に対してな」

「それはな。やっぱりな」

健三も困った顔になっていた。先生は彼氏と一緒に階段を昇っていた。そのままデレデレしていかつ優しい調子はそのま

であった。

「できないよな」

「そうだろ？何かやる気がなくなったよ」

忠直は困った顔になっていた。

「今の先生に対してはな」

「そうだよな。じゃあどうする？」

「家に帰ろうぜ」

忠直は静かにこう言ってきた。

「拍子抜けしたしな」

「そうか、わかった」

健三は忠直のその言葉を受けた。

「じゃあ帰るとするか。しかしな」

「しかし？」

「新井先生もあれだな」

ここで話は今日子先生に向かった。

「意外と可愛いんだな」

「そうだな」

何故か素直にその言葉に頷くことができた。

「意外とな。何ていうかな」

「それ見ていたらどうでもよくなったよ」

実は今まで今日子先生の厳しさに対する反発もあったのだ。ところがそれが消えてしまった。それで忠直もやる気を失っているのである。

「どうとでもなるしな」

「あそこまで揉めたのにか」

これには無意識のうちに言葉が出た。

「いいじゃないか。俺も引く時は引くんだよ」

「そうだったのか」

「今はその時だ」

彼ははっきりと告げた。

「そういうことだ。だから今は帰る」

「後悔はしないんだな？」

「俺の辞書にはな」

後悔という言葉を聞くと急に真顔になった。

「後悔とか不可能って言葉はないんだよ」

「そうなのか」

「ああ、消している」

大真面目に言ってきた。

「墨でな」

「そこまでするか。まあいい」

「ここまで話して話を打ち切ってきた。

「帰るんだったら帰るぞ」

「ああ」

こうして二人はマンションから離れた。そうして家に帰る。次の日学校に言ってみると異変が起こっていた。しかも極めつけの異変がである。

「皆さん」

「皆さん!？」

朝のホームルームで今日子先生がにこやかに笑っている。何とコソコソに変えてメイクも穏やかな感じだ。しかも服もいつものタイトミニとベストにネクタイではなくしっとりとした淡いピンクの丈の長いワンピースである。髪もストレートの下ろしている。

「あれ誰だ!？」

「誰だつてよ」

クラスの面々は教壇に立っているその女の人の見てヒソヒソとは梨をする。

「新井先生じゃねえか」

「嘘だろ!？」

すぐにそれを否定する声が出て来た。

「人が違うじゃねえか」

「違つていうかな」

今日子先生を見ながら話をする。

「別人にしか見えねえよ」

「つていうかさ」

女の子の間でも言葉が出る。

「女の人ってお化粧で変わるけれど」

「あれは幾ら何でも」

「眼鏡でもないしね」

とにかく目の前の今日子先生に啞然とするばかりであった。しかもその雰囲気まで全然違つていた。別人にしか思えないものがあった。

「体育祭の後ですが」

「それか」

忠直はその言葉を聞いて眉を顰めさせた。緊張により。

「どうなるんだ？」

「どうなつてもいいんだろ？」

それに健三が突っ込みを入れる。

「昨日言つたよな」

「男に二言はない」

忠直は腕を組みはつきりと言い切つた。

「だからだ。覚悟は決めている」

「そうか。ならいいがな」

「何処でも騒いでやる」

本音はこれであつた。

「それだけだ」

「そうだな。さて」

健三は忠直の話を聞いてからまた今日子先生に顔を戻した。

「どうなるかな」

「屋上で打ち上げパーティーをすることになりました」

「おっ!？」

「マジ!？」

皆その言葉を聞いて一斉に驚きの言葉をあげた。とりわけ忠直と健三はそうであった。二人共驚きを隠せないようであった。

「皆で楽しくやりましょう」

「どついう風の吹き回しかな」

健三はそれを聞いて忠直に言葉をかけてきた。

「これってな」

「さてな」

忠直は話が少しわかっているようであった。

「彼氏の言葉だったらしいな」

「そうだな。何か俺達が勝手に騒いだけか？」

健三はふところ思った。しかしそれでも悪い気はしないのであった。

「まあいいか」

「ああ」

そして忠直もそれに頷くのであった。

「いいものが見られたしな」

「そうだな。きっかけをな」

二人は笑い合っていた。そうして言葉を交えさせる。

「見られたっていうのはな」

「そういうことだな」

「では皆さん」

今日子先生は二人の視線に気付くことなく話を続けていた。確かにそれはこれまでの先生ではない。

しかしそれが本当の先生であるというのは二人は知っていた。そんな先生を見て楽しそうに笑う二人であった。

変わるきっかけ

完

変わるきっかけ

2  
0  
7  
・  
1  
2  
・  
2  
3

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6017d/>

---

変わるきっかけ

2009年3月24日11時02分発行